

## 蔵王とリンゴ

昭和六十年に妻の生家から「リンゴを作って見ませんか」と相談された、本畑から離れているので、手入れも継子扱いになるのだそうだ。

倭化で植えてから五年位で、成木になり沢山実を付けるようになったそうだ。二つ返事で作ってみることにした。富士、王林、津軽、ジョナゴールドの四種類が約百五十本植えてあった。

仙台より休み日に行つて手入れをした。薬剤散



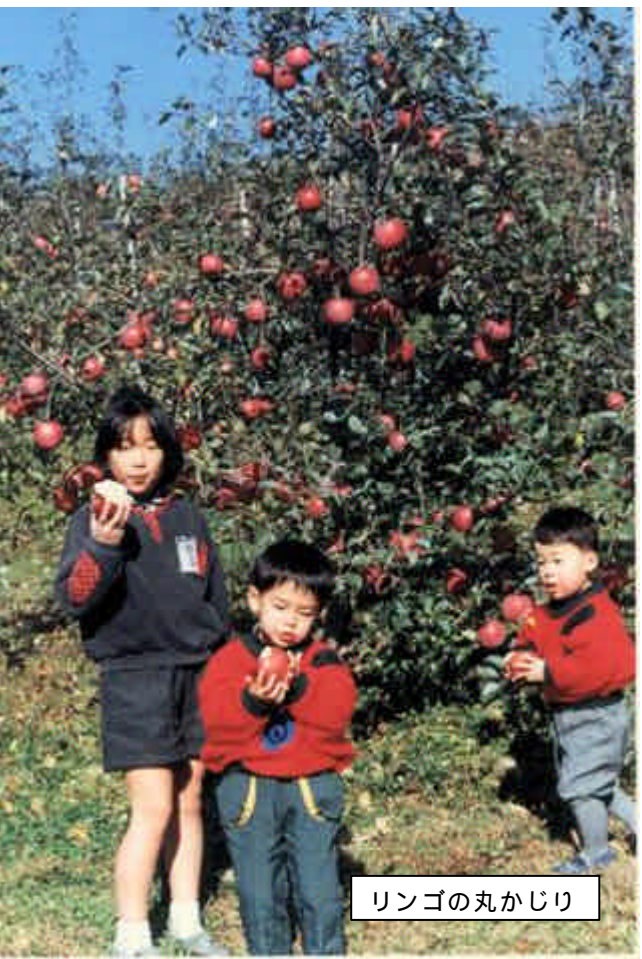
リンゴと自作の小屋

布は本畑をやる時、ついでにしてもらう事にして、体力的に作業が無理になる迄の、約十年間が始まった。苦勞もあったが、

私達の社交の場、憩いの農園、自然の中での魅力を満喫した。

最初の一年間は、対がん協会払い下げのバスで休んだ。がん協会に勤めている友人の小川さんの口聞きで、五万円で購入し、仮ナンバーを貰い、小川さんに運転して貰い、矢附に運んだ。

バスにはレントゲン装置一式、アンプ等、稼働していた時のままであった。矢附の庭に置いてあったが、内部の機械を全部取り払い、生家のリンゴ畑に義弟が運転し固定した。



リンゴの丸かじり



リンゴ畑に咲くコスモス

二年目になって、傍に小屋が欲しくなり、仙台で解体木材を貰い運び、墨つけ、刻んだ。基礎は防腐剤タツプリの電柱を使用した。傾斜した土地に建てる掘っ建て小屋であるので、都合がよい。

上棟式には在郷の兄弟夫婦全員集まり、三坪の小屋であるが、紅白の餅をまき、まき銭までして楽しい一日だった。出来上がって見れば、掘っ建て小屋とは思えない出来である。ふんだん

にコンパネを使用、中古のアルミサッシも捨てた物ではない。

発電小屋を作り小屋に電灯を付け、約百メートル離れた水源地から、ポンプで揚水、水通を引き、電話も引いた。中古の流し台を取り付け、換気扇、流し元灯を取り付け、新品のベランダも取り付けた。

一応の生活が出来る。今度戦争が起きたら此処に疎開したら安全だと、笑って話していた。飼っていた柴犬の（ポッポ）を連れ、放し飼いにして、何回か泊った。部落から離れているが、寂しいとは思わなかった。

帰りは菅生から樽水ダムを通り、中田の健康センターに寄り風呂で汗をながし、休んでから宮城野に帰る。一年間通用の入湯券を買ってあるので、楽しみだった。

家業の電気店を廃業したので、行く回数が多くなった。幼稚園前の二人の孫を連れて、時々行った。リング畑から見る眼下のハイウエー、紺碧の空に映える蔵王山等の風光は子供心にも素晴らしいと思うのだろう。

「暗くなつてから帰ろう」と言う。ハイウエーのヘッドライトの幻想に似た夜景が、前に連れて行き遅くなつた時のリンゴ畑から見えた感激を思い出して、云つたのだろう。パノラマのような眺めだつた。

平成元年蔵王町小村崎に土地を求め、建前してから約一年掛かりで、小さい小屋で寝起き、半分以上自作、妻と二人の共同作業で完成し、二年の夏引つ越した。

私は仙台や、遠刈田温泉に仕事があつたのでリンゴの手入れは主に妻の役目だつた。朝少し早く家を出て畑まで送って行き、それから現場に直行し、夕方迎えに行く、仕事の都合で遅くなつたり、秋の日の短い時など、小屋の中で、寂しそうに待つていた姿が目に見え、

十月になると津軽が収穫期をむかえる。前から植えてあつた栗もいっしょに、たわわに実っている。折からの芋煮会の季節である。仙台で開業時のお得意さんや、知人友人を招待、栗は拾いほうだい、津軽リンゴは一籠（約二十個）連れてきた子供



も平等で、大きいのを  
自由に取らせた。

栗を多く拾った人  
は二十キロ位もある。  
お昼近くになって芋  
煮会である。多い時に  
は三十人位集まる。

ビールなどの飲み物  
や、お菓子類を持って  
来る人が多い。若い女  
性に手伝って貰い、大  
きい鍋に一パイ作る。天気の良い日は、リンゴの木の間にシー  
トを敷き、輪になって、芋煮会が始まる。

天気の良い時は小屋の中と、ベランダに二十人以上も入って  
大騒ぎ、本当に楽しい一日で皆満足して帰っていく。年間訪れ  
た人々は百人を下らない。



モッテノホカを摘む

生まれて始めての栗拾い、リンゴ狩りをした人は殆どで、涙を流し、「生まれて始めて、こんな楽しい事はありません」と言い帰って行った八十才位のばあちゃんも居た。

遠くて来られない

人や、東京の兄弟には宅急便にて、十キロ一箱ずつ送った。

リンゴ一個の大きさも、木に沢山実らせないので、よその物より大きい。そして美味しい。一個五百グラム以上の物はザラにあった。義弟には薬剤散布代や、なにかにとして支払



早春の蔵王とリンゴ園

いする分と小遣い分を売った。

私も妻も体力的に無理になり、リンゴ作りを止めるまでの約十年間、毎年招待して芋煮会をやった。

そして去年三月仙台の家の二階が借り手がつかないので、三十五年間私達の歴史を作った古巣に舞い戻った。無理もない。時代が変わったのだ。

リンゴ畑を愛称「蔵王」やま」と言って親しんできた。仙台に引越してから、時々「やま」に行く、小屋の前にたたずみ、ハイウエー、蔵王山、青麻山、蔵王町の町並みを眺める時、

## 夏草や

# 兵ものどもの 夢のあと

の俳句を思い出し感傷に耽るのである。

あの時招待した人々は思い出してくれるだろうか。